

『曾根崎心中』

「観音めぐり」の復活

向 井 芳 樹

『曾根崎心中』の冒頭の「大坂観音三十三所めぐり」は、初演のときと、その後一度ぐらい舞台の上で演じられただけで、その後、一昨年まで陽にあたることがなかった。

「鎮魂曲」「招魂曲」「循環形式」「出端」「序開き」など、その意味付けが、多角的に学者によって試みられた割には、「現在の舞台にのせても面白くない」と、カットされ続けてきた。

お初の人形が、大阪の三十三所の観音を巡礼する、この部分は、実は、戯曲の構造から考えると、女主人公お初を紹介し、心中物ないしは世話物の世界を設定するための「序」であるというの、私の前から持論であったのだが、至極あたりまえのこと、特にあらためて言いつ折もつていなかった。

一昨年、宇崎竜童率いる「ダウン・タウン・ファイティング・ブギウギ・バンド」が、阿木燿子構成・作詩で、原作近松門

左衛門の『曾根崎心中 Part 2』を文楽人形の出演を得て、舞台にのせた。そしてそのLPが、発売された。最初の公演、といっても大阪でのものだが、大変感動した私は、その後の関西での公演は、今年のもまで含めて、三度も出かけ、あまりに絶賛しすぎて、ひやかされるほどであった。

まず観音めぐり（残念なことに、阿木はこれを「西国三十三ヶ所お札所めぐり」と誤解している）を、冒頭に復元し、十八番生玉本誓寺まで、たんたんと言だけを唱えるような形で展開している。原作が、観音めぐりを終ったあと、地理的にはずちによって、いろいろと問題にされているのだが、それを、「生玉」の地名の縁で、十八番で札所めぐりを中絶し、「生玉」の場の、ドラマの開始部分へつないだのである。この大胆な連想による改訂は、見事だといってよい。残りの十九番から、三十三番までを、どうするかと心配していると、心中場面が「南無阿弥陀仏」で終わったところで、再び、十九番菩提寺と再開して、三十三番平野新御霊へと、三十三所めぐりを完成させてくれるのである。ロック音楽で、淨るりにせまった宇崎たちの「音楽」の面での「近松」解釈は、まさに近松がねらったところの「観音めぐり」の役割を過不足なく再現することに成功した。

さらに、十八番の生玉本誓寺の札所のあと、「生玉恋参り」なるお初の「愛しいお方」を恋したう部分（これこそが、近松の観音めぐりのもっていた最も重要な側面である）を、設置してくれている。

そして、「風の噂」で、お初・徳兵衛の心中へのドラマを開始しているのである。

近松の「観音めぐり」が、「十八番までの札所めぐり」と「生玉恋参り」と「十九番からの札所めぐり」に三分割されて、その位置も冒頭と、末尾とに二分されてはいるものの、その果した役割は、宇崎の『曾根崎心中 Part 2』の中で、見事によみがえっているのである。

私は、まさに、友遠方より来たるのよろこびを満喫したのであった。

私は、とくにドラマの作家としての近松というイメージを強調して来たが、自分が不得意であることもあって、音楽としての浄るりと、その作家近松の側面にはほとんどおもいをよせることが出来なかった。ミュージシャン宇崎が、むしろ自然に「観音めぐり」の音楽的に占める『曾根崎心中』での位置を理解したことに、私は、大いに学ばねばならないと思う。

「生玉社」の場を、LP所収の台本に、うっかり「生玉本誓

寺」としていたり、「三番神明寺」と、原作の「神明宮」（当時の神仏混淆の例）を勝手に改訂したりした、若干のミスがある。国文学者の立場からは、指摘だけはしておかねばならない。しかし、そんな部分の欠点はあげつらう必要はない。

昭和における「曾根崎心中」の公演は、歌舞伎・文楽・映画・人形劇など、数多く試みられたが、そのどれもが果しえなかった、「観音めぐり」の位置づけを、一番遠いジャンルというか、方法で試みた宇崎たちが見事にやってのけたという事実は、私は、声を大にしてみんなに知らせておかねばならないと思う。